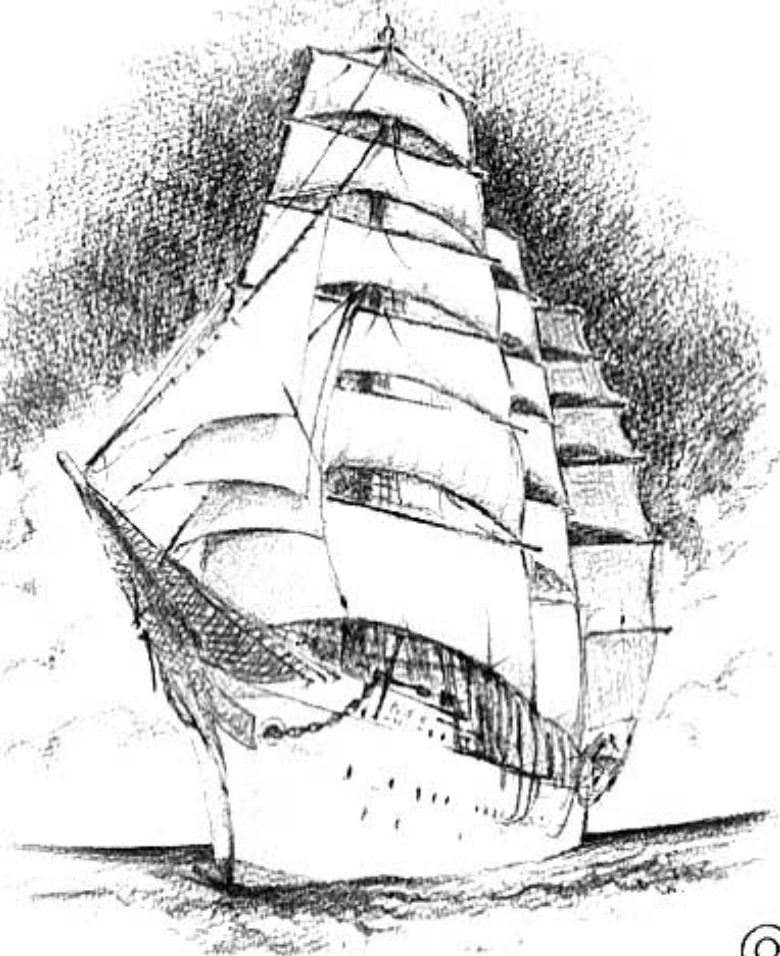


甲戌28年8月5日発行(毎月5日1回発行)
第56巻8月号(通巻685号)

風土



夏つばめ

南うみを

余り苗点晴として田を上がる

田の苗のをののきやまぬ蛇の波

縦横に田水濁して通し鴨

あめんぼに活着の苗峙てり

きぬさやのつめたき肌摘みにけり

羽化近き毛虫吹かるる草の先

草刈機ペットボトルを弾き出す

ぬくき夜に浮かんでほたるぶくろかな

音も無く蟹攀づ卵の花くたしかな

青蘆をゆさぶり来る投網打

瀬しぶきに触れむばかりや夏つばめ

沼蝦の跳ねて菖蒲田の真昼



竹間集

同人作品



青嵐 林いづみ

青柳寺地獄の釜の蓋咲けり
かげろふや記憶の波の寄せて来し
間引きたる竹の子山と積む寺領
たづさふる『がんしう』筒流しかな
南無桂郎南無呉夫居士青嵐
花蜜柑城太郎碑に逢ひにゆく
緑陰や水をつまづくこゑひろふ

五月来る 小林共代

五月来る舳に垂れし繩梯子
飛魚の跳ねる河口に船すすむ
渡し跡蓬の丈に風の来て
牡丹に少し離れて牡丹見る
一輪の牡丹が咲いて小宇宙
白牡丹静御前の舞姿
それ以後の話は後に心太

蛍狩 中根美保

夏兆す常の茂りの火焰木
十薬を沈めきれずよ谷戸の闇
欄干のしとどに濡れて蛍の夜
山の気のどつと下り来る蛍狩
しばらくは消ゆる瀬音や蛍狩
森の香の次第に濃ゆき蛍狩
蛍には蛍の天や昇りゆく

師系継ぐ

問島あきら

新緑へ一筋走る沈下橋
夏めくや行進合図の大太鼓
しあはせの黄色のポスト風五月
人を待つ空港デッキ夕薄暑
傘雨忌の「ことばらんど」に詩句さがす
男瓦の青の一文字夏つばめ
師系継ぐこころ一つに桜の実

夏 燕

宮川みね子

いち日の家明けてゐて夏燕
夏つばめまさをなる空ありにけり
ひこばえや大夕焼のなかに佇つ
初夏の竹人形の竹のかほ
著莪の花旅の目覚のひと日かな
初夏やぐらりと変はる鯉の向き
ほととぎす魚板のくぼみ打ちにけり

遠くとほくに

浜

福恵

逝く春を蝮はぐらりと身を揺らし
虎杖を折つて山鳩飛び立たす
大瑠璃や馬耳山中に風わたる
裏口に不在の木札羽抜鶏
かはらなでしこ家にはいつも母がゐて
蜻蛉を夕日に染めて母校かな
朴咲くや遠くとほくに父のこゑ

砂ずりの藤

門伝史会

薫風をまとひし句碑の月日かな
蛙鳴く水の浸み出す遊歩道
鴉の子生田緑地 生田緑地緑地の芝に文庫棚
花菖蒲水車返らぬ時きざむ
葉桜や画廊の隅の地震計
彼岸より此岸へなだる山の藤
神南備や砂ずりの藤香を揺らす

おほむらさき

橋添やよひ

膳所に降りしたしきものに夏木立
はせを墳これより二丁走り梅雨
木曾殿と蕉翁偲ぶ青葉闇
白扇のゆるき所作なる風はな羅はなの舞
ふくべ叩く振りのたおやか奉扇会
黄菖蒲の明かりの及ぶ翁堂
紫陽花の色生む雨と風欲しや
大名の菩提寺松の緑立つ

利休逝きて四百年や竹の秋
竹騒ぐ風は利休か亀鳴けり
荒梅雨や信長公の朱印状
信長公墓処大輪の牡丹咲く
側室の墓の低さや五月雨
「天平香」賜る鑑真忌の近し
麦笛や何をせむとや遺されて
風青く竹を撓らすエジソン碑
鑑真の坐像へとどく余花の風
天平のいろを残して杜若
白隠の禅問答や梅雨寒し
谷崎の碑よりおほむらさきの翔つ

山河集

同人作品



南うみを選

四十雀一呼吸おき木の洞へ
森高やよこ

師にまみゆ思ひの中に今年竹
城太郎和尚の句碑や緑さす
桂郎の句碑も墓前も新樹光
鯉はねてまた鯉はねて初夏の雨

無欠勤無趣味筍飯を炊く
豎山道助

車間距離保たれてゐる遅日かな
校長の髭伸びてゐる遅日かな
初夏の皿にフォークの触るる音
誰が開けしパンドラの箱守宮落つ

老鶯の声に埋もるる能舞台
佐藤 恵子

水流る音きらきらと水芭蕉
夏シャツがペットボトルをわしづかみ

発電の白き風車や雲の峰
天気図を見てより衣更へにけり

もこもこと毛虫の急ぐ昼下り
本間 羊山

若葉風凶鑑の鳥を翔たせけり
梅雨寒く青の時代のピカソの絵
太陽に錆びて伏したる秋田蒨
新緑に全身染まる車椅子

まつすぐに天文台に夏来り
布施まこと

青空を残して暮るる夕牡丹
植物園に五月の風や大櫻
くれなゐや薔薇の百花の中に佇ち
姉の忌や夏蝶前にうしろにも

香水や第二言語は中国語
薫風に葉の紐を解き放つ
真空となりて暑中見舞くる
撤水車去りてボールを高く蹴る
キャンプファイアー高く星空映画祭

中嶋 陽子

四十雀桂郎居士へ鳴き止まず
黄菖蒲の揺れや遠のく小田急線
竹林よりキキツと鳴る音傘雨の忌
新茶摘み赤子に触るる思ひかな
孟宗竹の山路散歩や薄暑光
捨てきれず逃ぐるも出来ず畑を打つ
聞くとなく聞こえて虻の羽音かな
鍬を振る土をよすがに梅雨やませ
山独活の藪みに虜いつしかに
草むしる母の姿の定まれり

安永 圭子

薫風や句碑の面にまた裏に
黄菖蒲や鯉のうしろに小さき鯉
若葉もて楨植は小さき実を隠す
ひと枝の撓むとみれば青大将

内藤 静

草笛のすぐに鳴る人鳴らぬ人

十葉や夢二の墓の「埋む」文字
紫陽花やあしたはきつと変はれるはず
紅薔薇も廻るよメリーゴーランド
薫風がくすぐつたいぞ羅漢さま
衣更へてふうらりふらり蚤の市

雨宮 桂子

富士さくら芝さくら咲く湖畔かな
満天星の咲く溶岩の垣根かな
雨上がり万緑となる御所の森
桃林も梅林も葉は緑なり
月光の中に青梅膨らみぬ

杉本葉子

苗代田のめつきり減りし宇陀郡
著莪のみち傘差し来るは女人らし
縄張りに我が畑も入れ行々子
新緑に箭も若き声返す
袋角伸ばし野性の眼の光る

上辻 蒼人

奈良町や右も左も柏餅
緑蔭に順目逆目の苔の波

奥田 茶々

◇特別作品◇

高麗郡建郡千三百年二年 高麗の一日 安永 圭子

風薫る高麗の日韓友好祭
集合の高麗川駅や祭笛
高麗神社へ花水木みち田圃道
高麗人の彩る庭や忍冬
木槿咲けば韓国国花と思ひけり
初代王若光祀る宮の春
麗らかや出世開運神崇む
汗ばむや階段数へつ本堂へ

聖天院

高麗神社

石重ね高麗王廟や蝶の舞ふ
畑一面馬鈴薯の花合唱す
表札の「子を守る家」祭かな
踏青や万葉歌碑へ瀬音道
汗ばむ子確と網持て川せせり
「土石流危険」札あり舟遊び
小憩や馬頭観音木下闇
故郷に戻れぬ石や大夕焼
釈超空歌碑に鹿笛響く春の空
日傘さし詠ふ高麗錦(こしき)の万葉歌
暮れ落つや帰宅促す川蛙
「高麗の郷」沁むるCD夜涼かな

風土独語／南 うみを



四十雀 一呼吸おき木の洞へ

森高さよこ

この世界は、「四十雀」が巢の中へ入る直前を捉えたものです。ポイントは「一呼吸おき」です。これで巢の中に卵か雛がいることがわかります。「一呼吸」あたりを見回し安全を確かめて、「木の洞」の巢へ入っていったのです。何でもないのでありますが、この頃の親鳥の生態がきちんと描かれています。

十葉を引けば不屈の香りあり

内藤 静

「十葉」はその字の通り葉になる植物です。梅雨の頃やや暗いところに繁茂します。作者は葉草と「て引いたのでしょうか。それとも雑草として。何ものにも負けない「不屈の香り」とありますから葉草として引いたのでしょう。あの強力な匂いを「不屈の香り」としたところに「十葉」の面目躍如たるものがあります。

万緑をかづき木地師の轆轤匏

森屋 慶基

「木地師」の工房は木材が手に入りやすい山深いところにあります。この「木地師」は今、椀を作っているところでしょうか。匏を持ち、屈むように轆轤に向かっています。工房のまわりは鬱

蒼とした青葉の木立です。作者は「木地師」と青葉の木立を俯瞰して「万緑をかづき」と表現しました。木と共に生きる「木地師」への讃歌です。「かづき」とはよきことばです。

誰が開けしパンドラの箱守宮落つ

豎山 道助

「守宮」が硝子戸から落ちたのを、「誰が開けしパンドラの箱」と大仰に打ち出しました。私たちはギリシャ神話を想い起しながら、「守宮」が落ちたのを良きことか否かと反芻するのです。大胆な取り合わせで「守宮」の新たな世界が見えます。

夏シャツがペットボトルをわしづかみ

佐藤 恵子

近年「俳句のことば」の流通の世界で、「ペットボトル」がすっかり市民権を得ました。会議や句会でも当然のように「ペットボトル」のお茶や飲み物が置かれているという日常が基盤にあります。この句「ペットボトルをわしづかみ」で、思春期の少年を想像します。きっと一気に飲み干したのでしょう。

山藤の房清流に触れなむと

本間 羊山

これは「山藤」と「溪流」の取り合わせです。山の藤はいたる上ころの木々に絡みついています。溪流の上の崖から垂れさがっているのでしょうか。荒瀬のしぶきに触れんばかりに「山藤」が揺れているのです。自然の生きいきとした在り様が描かれています。（以下略）

風土集



南うみを選

将門の神を祀りて花菖蒲

川崎

内藤 静

繰り返す電光ニユース夕薄暑

さつと降るぎんいろの雨初鯉

十葉を引けば不屈の香りあり

京二夜筍飯でしめくくる

聖域めきぬ雪椿のふたつみつ

横手

森屋 麿基

裾分けの蕨の束を数へけり

野に還る温泉跡地苔青む

万緑をかづき木地師の轆轤鉋

五月雨や有る物尽し俎板に

吹かれ落つ絵馬ばらばらに山の蟻

秋田

本間 羊山

大壺や芍薬の白余さずに

山藤の房清流に触れなむと

野の鳥の交ごも零す緑雨かな

とりどりの花咲きつぎて六月来

武相荘に骨董市や柿若葉

川崎

鈴木 庸子

着こなせし遺愛の白地紬かな

万緑へ打ち込む真田陣太鼓

春愁をしまふ巾着真田紐

山藤ののぼりつめたる修業岩

ひらひらと川渡りゆく立夏かな

福生

雨宮 桂子

朴若葉一枚づつに風のせて

ハンカチの花涙法師の母なりき

あぢさゐやいつも待つてゐるあした

ぼうたんや遺影は花びらのやうに

笑ひ声禁ずる店や夏座蒲団

東京

中嶋 陽子

蝶の屋二重に結ぶ靴の紐

三段階伸ばす梯子や夏めきぬ

オーディオの電池錆びる夜の新樹

青嵐ペットボトルをつぶす音

コ